

## 惻隱の情

山ほどある「惻隱の情」の例をあげよう。戦時中のことである。

大東亜戦争のとき、イギリス戦艦プリンス・オブ・ウェールズが、日本軍の航空機のみによって撃沈されたとき、チャーチルは驚天動地、なす術がなかった。ひどく落ち込んだのであるが、このとき、日本海軍から生存者救助中の駆逐艦に対し、「われの任務は完了せり。速やかに救助されたし」と電報をうった。

有名な話だが、スラバヤ沖海戦で撃沈された軍艦から投げ出されたイギリス兵は、死を覚悟していた。ここに、撃沈した当の駆逐艦「雷（イカヅチ）」の艦長は、敵潜水艦からいつ雷撃を受けるかわからないのを承知で、しかも乗組員も躊躇することなく、懸命に彼らを救出しようとする。結局 422 人を救出。今にも沈み込んでしまいそうな兵に対し、飛び込んで助けたものも多い。

船内では、貴重な真水をふんだんに使い、アルコールなどで重油をふき取り、温かい飲物や食べ物も用意する。艦長は、工藤俊作で、海兵 51 期。(樋端久利雄の同期)救出したイギリス兵に向かって、“**You had fought bravely. Now you are the guests of the Imperial Japanese Navy.**” (あなたがたは勇敢に戦われました。今や、あなたがたは、帝国海軍の客(ゲスト)であります。)英兵はびっくり仰天。「これが武士道か」

実際、「雷」のみならず、数隻の艦が敵兵を救っている。救出した英兵がいつばいで、砲塔を回転させることもできなくなっている。これをみた司令長官は、初めは驚き、次いで「見よ、あれを見よ。あれでいい。あれでいいのだ」と見張り員に対し満足気に述べた。

どうやら、「万が一の場合は、日本の艦艇に向かって泳げ。かならず救出してくれる。」という話が、プリンス・オブ・ウェールズの乗組員だった男らが、英軍艦艇の乗組員に伝えていたらしい。

ここで重要なことは、戦後も含め、誰一人この救出劇を他人に語った形跡がないことである。自慢にしてもいい話だと思うが、みんな沈黙を保ち、助けられたイギリス兵の話から広まったらしいことである。

さきの工藤俊作少佐も、縁辺にも語った形跡がないことで、彼は埼玉の姪の経営する医院の経理を淡々とこなしていたという。

そこにあるのは、日本人としての心根であり、矜持でもある。この国には、確固たる美德がある。それは、弱者に対する憐憫であり、ときには自己を犠牲にしても他者を救わんとする。日本人であれば、誰でも備えている資質である。「雷」の乗組員にも半ば本能的に備わっていた、と考えた方が正解に近いのではないか。

この出来事の 50 年前には、トルコ軍艦エルトゥールル号の遭難に、大島の漁民が命懸けで嵐の海に飛び込んで 69 人を救助している。トルコの教科書には、詳細に載っていて、国民全部が知っていることである。(のちに日本が何もできなかったテヘランからの日本人の救出にトルコ機が恩返しだと飛んでくれた。)

杉原千畝の場合も、外務省は許可しなかったが、オトポール事件の矢野季一郎中将の話を知っていて、同じ岐阜県出身者として、ビザを書ける限り書いて、6000 人のユダヤ人を救出した。戦後外務省から嫌がらせをうけており、現在にいたるまでの経緯を考えれば「**外務省不要論**」まででる始末である。

さきのトルコ機の話やイラクがクエートを侵略したときの人質事件などについては、門田隆将さんが何年もかけて取材し、まとめておられる。近々、これについても書く予定です。(日本遥かなり)

2015. 12. 12.